

産業学会中部部会（2015年度）報告要旨

●第1報告：「日本自動車整備産業形成史」

小川秀貴（株式会社 小川モータース）

日本の自動車産業史を対象とした研究は数多く存在するが、それらは自動車製造業及び自動車流通業に関するものがほとんどである。本研究では、自動車整備産業の形成過程を明らかにしたい。

現在の日本自動車整備産業は、ディーラーによる大規模整備工場と整備業者による零細整備工場という、規模における二重構造を示している。しかし、両者の根源的差異は規模ではなく、流通業とサービス業という業種の違いに存在する。ディーラーは本質的に流通業者であり、整備業者はサービス業者である。

前者の源は、戦間期において主に輸入自動車の流通とそれを支える修理を担った自動車業者に、後者のそれは、地場の需要に基づき、主として自転車をその進化の出発点とする小型自動車の修理と流通を担った小型自動車業者に遡る。戦間期に漸く普及し始めた、自動車/小型自動車の利用を支える自動車/小型自動車販売修理業界が個々に形成された。

日本自動車整備産業の源である。そして、戦時統制期、戦後復興期、高度成長期を経て今日の姿に繋がる。

●第2報告：「ドイツ自動車産業の開発・生産・サービス各領域における先駆的事例」

佐伯靖雄（立命館大学）・菊池航（立教大学）

本報告の目的は、2015年8月17日から25日までの期間に筆者らが実施した、ドイツ各地でのフィールドワークから得られた知見を集約し報告することである。具体的には、デュッセルドルフ及びデュースブルクなどを中心としたルール地方で展開する産学官連携形態でのEV専用カーシェアサービスの概要と課題、次にドレスデンにあるVWの高級車専用工場における少量生産システムの諸特徴、そしてライプツィヒにあるBMWのEV/PHEV工場で展開される先端生産システムの諸特徴について報告していく。

EVカーシェアの事例からは、複数の類似したサービスを提供する業者が乱立するドイツ市場において、差別化の源泉はどこにあり、それをどのように事業活動に統合していくかという示唆が得られる。次のVWの高級車生産の事例からは、多くの製品ラインの中で標準化と収益化とを両立するための企業戦略が見えてくる。最後にBMWのEV/PHEV生産の事例からは、基幹部品のモジュール化が顕著とされるEV関連製品が追求しようとしている事業モデルの実態が明らかになる。

●第3報告:「日本ネジ産業の競争力—競争優位の持続と後退—キャッチアップ国との比較を通して」

近藤淳 (アジアプランニング株式会社)

本報告の課題は、日本のネジ産業を対象に、競争力と競争優位の源泉を明らかにすることにある。分析は日本のネジ産業に対するキャッチアップ国（地域）であり、競争関係にある、台湾・中国の同産業と比較して行うこととする。

産業研究においては、既に各産業は幅広く研究され、産業毎に、産業史・産業動態等について重厚な研究業績が存在している。当然ながら、国・地域間での競争優位・競争構造に焦点を当てた研究も数多く見られる。

東アジアでは、先行した日本の各産業と、台湾・中国・韓国等の同一産業の競争が、「キャッチアップ」「雁行形態」「技術移転」「波及モデル」と言ったキーワードから取り上げられることが多い。しかし、対象となる産業を一瞥すると、自動車・二輪・電機・造船等の最終組み立て産業か、鉄鋼や化学と言った、素材産業の二極に偏っている。相対的に産業構造の中間部に位置する産業について論じたものが薄いのである。

ネジやバネ、歯車と言った基盤技術産業の生み出す部品は、あらゆる産業に関連し、精密性や安全性に深く関わるケースも見られる。日本の優れた最終製品が、これら産業に支えられていることを考えれば、基盤技術産業も等しく分析されるべきであろう。